

【沖縄県の文化】

1. 世界遺産

琉球王国のグスク及び関連遺産群

2000（平成12）年12月、沖縄県にある9つの文化遺産が「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として世界遺産に登録されました。「グスク」とは、主に古琉球時代に力をつけた各地の豪族が築いた城塞のことで、かつて琉球王国の政治・外交・経済の中心地として栄えた首里城跡をはじめ、琉球国歴代王が眠る墓、古琉球時代の神秘的な聖地、英雄伝説が残る各地の王の居城などを見学しながら、14世紀から18世紀にかけアジア周辺諸国との交易を通じて独自の発展を遂げた琉球の文化、信仰などを感じることができます。

「世界遺産」とは

1972（昭和47）年のユネスコ総会で採択された「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」に基づき、世界遺産リストに登録された遺跡や景観、自然など、人類が共有すべき普遍的な価値を持つもののこと。



今帰仁城跡（なきじんじょうあと）



三山時代に築かれた北山王の居城跡。背後には聖域とされるクボウ御嶽があり、「神の城」としても知られています。標高90～100mの丘の地形に沿って積み上げられた城壁の長さは1500mにもおよび、城の面積は首里城にも匹敵する大きさです。北山は日本や中国・東南アジアなどと交易を行い栄えていましたが、1416年に中山王の尚巴志（しょうはし）によって攻め滅ぼされました。

場所	国頭郡今帰仁村字今泊5101
連絡先	今帰仁城跡管理事務所 TEL:0980-56-4400
URL	http://nakijinjo.jp/
入館料金	小中高生300円（団体240円）

【沖縄県の文化】

1.世界遺産

座喜味城跡（ざきみじょうあと）



三山時代の1420年代に、築城の名手とも呼ばれた名将・護佐丸（ごさまる）によって築かれた城です。西海岸を見渡せる標高125mの丘に、座喜味の北東4kmの位置にあった山田城を解体して、手渡しで積み石を運ばせ築かれたと伝えられています。二の郭に残る城門は、沖縄に現存する最古のアーチ門と考えられています。

場所	中頭郡読谷村字座喜味708-6
連絡先	読谷村歴史民俗資料館 TEL:098-958-3141
URL	—
入館料金	無料

勝連城跡（かつれんじょうあと）



15世紀に琉球統一の野望を抱いた地元の英雄・阿麻和利（あまわり）の居城と伝えられています。築城は1200年代とされ、自然の地形を巧みに利用し、切り立った崖の際にまで石垣を積み上げています。城跡からは、日本本土や奄美、朝鮮、中国などの産物が出土し、阿麻和利が海外との交易により力をつけていたことがわかります。

場所	うるま市勝連南風原3908
連絡先	勝連城跡休憩所 TEL:098-978-7373
URL	http://www.katsuren-jo.jp
入館料金	無料

【沖縄県の文化】

1.世界遺産

中城城跡（なかぐすくじょうあと）



海を見渡せる標高160mの高台にあり、南に中城湾、西に東シナ海を望むことができます。1440年頃に築城の名手・護佐丸（ごさまる）が座喜味城から移り住み、周囲の城壁を増築したといわれています。1853年にこの地を訪れた米国艦隊ペリーの一行もこの城を測量し、築城技術の高さを賞賛しています。沖縄戦での被害が少なかったため、築城当時の姿を残している数少ないグスクです。

場所	中頭郡北中城村字大城503
連絡先	中城城跡 TEL:098-935-5719
URL	http://www.nakagusuku-jo.jp
入館料金	中高生300円（団体200円）

首里城跡（しゅりじょうあと）



15世紀から約450年にわたり、琉球王国の政治・外交・文化の中心地として栄華を誇った城です。その中心には、沖縄最大の木造建築物といわれる正殿。日本と中国の建築様式が取り入れられ、独自の芸術性にあふれています。城外には守礼門など2門があり、石灰岩の切石を積み上げた城壁には、歓会門、瑞泉門、白銀門などの城門が設けられていて、琉球の歴史や文化を伝えてくれる見所がたくさんあります。

場所	那覇市首里金城町1-2
連絡先	首里城公園管理センター TEL:098-886-2020
URL	http://oki-park.jp/shurijo/
入館料金	高校生620円（団体490円）、小中学生310円（団体250円）

【沖縄県の文化】

1.世界遺産

園比屋武御嶽石門（そのひゃんうたきいしもん）



首里城の一角にある石門で、第二尚氏王統の1519年に創建されました。木の門扉以外は石造りですが、屋根の飾りなどに木造建築で見られるような見事な彫刻が施されています。園比屋武御嶽は御嶽（うたき）と呼ばれる聖域で、国王が城外へ外出する際にはここで道中の安全を祈願したり、女神官の最高位である聞得大君（きこえおおきみ）の就任式の際にもここを参拝したと伝えられています。

場所	那覇市首里当蔵町3
連絡先	那覇市市民文化部文化財課 TEL:098-917-3501
URL	—
入館料金	無料

玉陵（たまうどうん）



1501年に第二尚氏三代目の王・尚真（しょうしん）の時代に創建されたと伝えられる陵墓。周囲は石垣で囲われ、骨を納める墓室が東西に3つ連なっています。東室は洗骨後の王と王妃の遺骨を、中室は洗骨までの遺体を、西室にはその他の家族の遺骨を納めています。石造りの棟には、王家の家紋などが彫り込まれ、左右の塔には陵墓を守るシーサーが置かれています。

場所	那覇市首里金城町1-3
連絡先	玉陵管理事務所 098-885-2861
URL	http://www.city.naha.okinawa.jp/kakuka/kyouikubunkazai/bunkazai/tamaudun.html
入館料金	高校生以上300円（団体240円）、中学生以下150円（団体120円）

【沖縄県の文化】

1.世界遺産

識名園（しきなえん）



1799年に造られた王家の別邸で、中国皇帝の使者・冊封使（さっぽうし）をもてなす場として利用されていました。首里城の南に位置していることから別名「南苑（なんえん）」とも呼ばれていました。池を中心に赤瓦の御殿、築山、果樹園、樹林が配置され、池の周りを散策しながら景色の移り変わりを楽しむことができる回遊式庭園です。

場所	那覇市真地421-7
連絡先	識名園管理事務所 TEL:098-855-5936
URL	http://www.city.naha.okinawa.jp/kakuka/kyouikubunkazai/bunkazai/shikinaen.html
入館料金	高校生以上400円（団体320円）、中学生以下200円（団体160円）

斎場御嶽（せいふあうたき）



琉球神話の創生神・アマミキヨが創ったとされる琉球王国最高の聖地で、かつては男子禁制とされていました。2枚の大きな岩が重なり合っ、三角形の門を形成している三庫理（さんぐーい）を抜けると、女性神官最高位の聞得大君（きこえおおきみ）の即位式が行われた大庫理（うぶぐーい）や、神の島とされる久高島が参拝できます。

場所	南城市知念字久手堅
連絡先	緑の館セーファ TEL:098-949-1899
URL	http://www.city.nanjo.okinawa.jp/tourism/2011/11/sefa.html
入館料金	高校生以上200円（団体150円）、小中学生100円

【沖縄県の文化】

2. 民俗文化

ハーリー（ハーレー）

ユッカスヒーと呼ばれる旧暦の5月4日には、県内各地で航海の安全と豊漁を祈願する祭り「ハーリー（地域によってはハーレーという）」が行われます。

もともとは中国から伝わったとされる船漕ぎ競争で、競技を行う前に村の聖地である御嶽（うたき）で祈願をしてスタートします。学校対抗戦や、各種団体の対抗戦、村落（ムラ）対抗戦などが行われ、最後に海の彼方から幸せを呼び寄せるという御願（ウグワン）バーリーを行います。

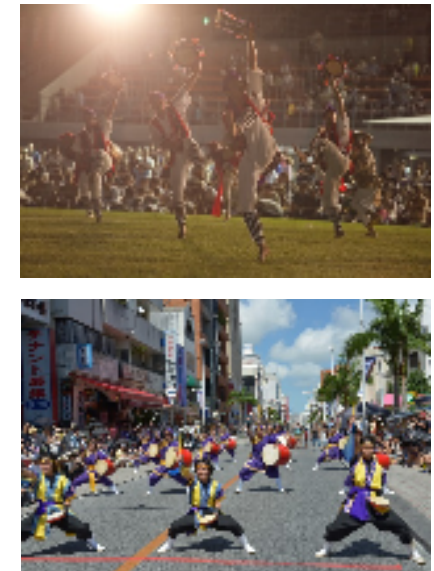
また、地域によっては、旧暦の5月ではなく、新暦5月のゴールデンウィークに開催するところや、海神祭（ウンジャミ）の時に船漕ぎ競争を実施する地域もあります。



エイサー

エイサーとは、沖縄本島中部で旧盆に行われていた先祖供養の踊りのこと。「エイサー、エイサー」という念仏歌の囃子に由来しています。もともとは、旧盆の精霊送りの日のみに踊られていましたが、戦後、若者達によって音楽や衣装、振付に至るまで様々な工夫が盛り込まれ、念仏歌も流行の民謡や恋歌などに変わり、エンターテインメント性の高い沖縄の夏の風物詩になりました。

各地で行われているエイサーには多種多様な特徴がありますが、一般的には、男性が大太鼓、締太鼓、半胴鼓（パーランクー）を打ち鳴らし、女性が手踊りをします。それを三線を弾く地謡（ジカタ）、酒担ぎ（サキカタミヤー）、チョーギナー（あるいはチョンダラー）と呼ばれる道化が盛り上げ、皆で賑やかに踊ります。



【沖縄県の文化】

3. 伝統工芸

陶器（ヤチムン）

沖縄では、陶器のことを「ヤチムン」と呼びます。沖縄では中国や朝鮮との交流によって、古くから質の高い陶器が作られていました。沖縄の代表的な陶器「壺屋焼」は、17世紀に中国に渡って修行をした平田典通（てんつう）が、帰国後、琉球王国の御用品を焼いたことに由来し、1985年には、金城次郎が人間国宝に認定されて評価を高めました。

壺屋焼には、光沢のある釉薬（うわぐすり）をかけた「上焼（ジョーヤチ）」と、釉薬をほとんどかけない「荒焼（アラヤチ）」があります。日用雑器など比較的小さなものは上焼、水瓶や酒瓶など大きなものは荒焼で焼かれることが多いようです。

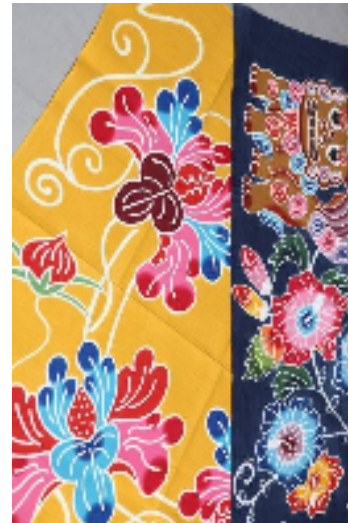
成形方法は、本土と変わりありませんが、ロクロ成型を左回転で行うことと、沖縄特有の骨壺（厨子甕）を作るために木製の箱を利用する「型おこし成形」など、特徴的な技法もあります。



紅型（びんがた）

紅型は沖縄を代表する染物です。インドやジャワ更紗の技法、中国の型紙の技法、京友禅の手法などを取り入れ、18世紀の中頃にはその技法が確立されたといわれています。当時は、中国から輸入した高価な顔料を使用していたため、王族や士族など、身分の高い人たちの衣装として発達し、その文様、図柄、色は、着る人の階級、年齢、性別によって区別されていました。

染色方法には、あらかじめ色をつけたくないところに糊を塗って染める「型染（かたぞめ）」と、糊を入れた筒状の袋で模様を描いてから染める「筒描き（つつがき）」の2種類があります。



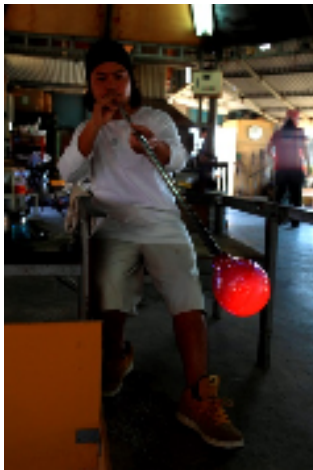
【沖縄県の文化】

3. 伝統工芸

琉球ガラス

琉球ガラスは、戦後の復興期、物がなかった時代に、米軍から廃棄されたコーラやジュースの空きビンを利用して、コップなどの日用品を作ったのが始まりです。その後、1970年代に迎えた本土復帰や、沖縄国際海洋博覧会の開催に伴って沖縄観光が一般化すると、観光土産として食器やインテリア、アクセサリーなど様々な製品が製造されるようになりました。現在では、従来の廃ビンを利用する工房と、新しいガラス原料を使用する工房が混在していますが、日用雑器から芸術性の高い作品まで様々なものが作られ、沖縄の新しい工芸として定着しています。

琉球ガラスの技法には、吹き棹の先に溶けたガラスをつけて息を吹き込む「宙吹き法」と、型の中で吹き込む「型吹き法」があります。また装飾法にも「被せガラス」「斑紋溶着ガラス」「箔溶着ガラス」「泡ガラス」など、様々な技法があります。



4. 伝統芸能

三線（サンシン）

琉球王朝時代に中国南部の泉州・福建地方から伝わったとされる三線は、16世紀頃には琉球音楽には欠かせない楽器として定着しました。日本の三味線と比べると、沖縄の三線は小ぶりで、棹（ソー）には黒漆を塗った黒檀や紫檀が使われています。胴（チーガ）にはニシキヘビの皮が用いられ、駒（ウマ）は竹製で、牛角や水牛角などで作った爪を人差し指につけて演奏します。

終戦後、沖縄の人々は収容所の中で空き缶とパラシュートの紐などで作った「カンカラ三線」を弾き、沖縄戦で傷ついた心や戦後の生活のつらさを紛らわしました。そんな中、後に沖縄のチャップリンと呼ばれた小那覇全孝（おなはぜんこう）は、「ヌチヌグスージサビラ（生き残ったお祝いをしましょう）」と、三線を片手に家々を訪ね歩き、失意に暮れた人々に生きる希望を与え続けました。

